聖書における沈黙について

伊藤利行

一　はじめに

筆者の学問的研究生活の出発点に修士論文『ΠΑΡΡΗΣΙΑ～第2コリント3章12節の研究』がある。この論文に関して水垣先生から、語るということを中心にして考察をさらに進めればとの示唆を頂いたことがあったが、当時の筆者は、その方向に向かうことはなかった。むしろ先生が使徒行伝の研究から出発して教父の研究に向かうという、原始教団から下るという道を行かれたのとは逆に、筆者は原始教団から遡る、即ち、新約思想の背後にあるセプトゥアギンタの思想的意義の重大性を探り、そこからあらためて新約聖書以降の思想を捉え直すという道を行くことにした。

最近の拙論「宗教と言葉――キリスト教理解を基礎として」[1]の脱稿前後から、宗教と言葉について考えることが多い。本稿は、宗教と言葉の関連で、〝語ること〟の対極としての〝沈黙〟について聖書を背景として考えた事柄を記そうとするものであるが、現時点では網羅的な資料の検討に基づく体系的な記述には到達しておらず断片的で不十分なものであらざるをえないが、恩師の記念号に掲載するテーマとしては、それなりの意味があると考えた次第である。

二　宗教・言葉・沈黙

宗教は、言葉と深いかかわりを持っている。とりわけ、聖書のような経典を持つ宗教にとっては、その理解が重要であることは自明の事柄であるといえよう。そこで、経典の本文の理解を目指して、様々な視点からの研究がなされるのであるが、歴史的・言語的な隔たりのために困難が伴うことはもとより、正しく本文を理解する上で、常に問題となるのは、いわば書かれざる言葉の背景である。

宗教は、万人に通じるものであると同時に、その極みにおいて個というものを大切に考えるので無ければ真の宗教とはいえないであろう。そうすると、聖書の記述のように歴史的状況の中で生じた具体的出来事・具体的な集団や個人を啓示の器としているものを理解しようとするとき、歴史的出来事や集団に関する事柄については具体的な傍証等を探し出したり、生活習慣や社会構造のような事柄の研究によって理解が深まるといえるのだが、その媒介となる器が、個的な特徴を深く持っている場合には、その個における内面への深い理解・洞察が要求されるものといえよう。そこで問題となるのが、そういった状況における個における書かれざる状況・隠れた部分である。これは時という壁を伴った理解を阻む深い沈黙の内にある。

ところで、一般に沈黙とは何かと問うてみると、「沈黙とは言葉を発していない状態」と考えて良いであろうが、少し省察してみると、いくらかの考慮すべき点が思い浮かんでくる。それらを整理してみると、第一に、語る（物理的に観測可能な音声あるいはそれに類する言葉の機能を外部に示すもの）という事柄との関わり方がどのようになっているのかという点である。音のある、正確には音声のある状態、あるいは明確な言語表現に相当するしぐさ等がある

状態を沈黙と呼ぶことはできないという点である。換言すれば、《公然と外に向かって語ることの逆の状態》が沈黙であるという点である。これは最も基本的な事柄であって、熟慮しないで「沈黙とは何か」という問いに答えた場合と何ら変わることはない。しかし、これのみでは沈黙という事柄の本質は言い尽くされない。第二の点は、この第一の点と関連するのだが、「外部からの観測が不可能な状態での言葉の使用状態」という事態が考慮されなければならない。外部に言葉を発しないからといって人は、決して真に黙っているというわけではない。むしろ人は、語りつづけている。人は内面で常に休むことなく語っている。外部から進入してくる様々な刺激に対して、反発したり、同意したり、あるいは無視したりしているのである。人が何事かを感じて考える時、それを根底で支えるのは言葉の働きである。この働きが絶えず内部で行われた上で、人はある状況下で言葉を外部に発するのである。人の明瞭な意識は、言葉の内に成立するものである。意識がある状態では、人は常に語っていると見做すことさえできよう。換言すれば、《内に向かって語るものである意識と沈黙の関係》という点である。第三に、沈黙という状態が、何らかの形での外部からの指示に応じて生じているのか、あるいは人の内部から自発的に生じているのかという点である。換言すれば、《沈黙の主体性》という点である。例えば、「静まれ」と言われて、話を止める場合などがそれにあたる。宗教上の沈黙を守る修行のようなものも、自発的に修行として行っていたとしても、それが教えられたものとして受け止めるならば外的な規制とも考え得る。また、別の例では、内面において自己が自己に向かって「静まれ」と語るような場合もある。第四に、沈黙は、常にではないものの何らかの外部への意思表示の意味を持つということもある。これが、《行為としての沈黙》という点である。これらの点は、聖書における沈黙を考察する場合に該当するものと考えられる。

ところで、このような沈黙を取り扱おうとする理由は、上記の個的存在の理解を目指すために必要であるというこ

と以上に、そもそも外に現れて明白に判別し得るような人の言動というものよりも、表面には現れてこない隠された部分のほうがはるかに多いと考えられるからである。しかし、この隠された部分にあるものをできる限り正確に探り出すことを阻む大きな困難が存在する。それは、他でもない、沈黙ということ自体が、本質的に隠されている現実であるという点である。では、沈黙が指し示している内容を理解することは不可能なのだろうか。沈黙を理解する方法は無いのだろうか。目の前に生きて沈黙している人が対象として存在するならば、色々と問いかけながら、その反応を基にして心の奥底を探ってみるという手法もとれなくはないが、聖書の理解においては当然不可能である。そこで、聖書の場合は、文脈から読み解く以外に手法は無いことになる。すなわち、本文に示される沈黙に伴う状況との関係の中で明確になってくるものを探り出し、表現の背後にあるものを理解するという手法である。これだけ言ってしまえば、普通の解釈法と何ら変わることはなく、何らの進展もないように解されそうであるが、わざわざ沈黙を取り上げるのは、聖書の中に出てくる諸概念を歴史的に追跡するような種類の研究と決して同列の意識で行うのではない。即ち、「沈黙」という一つの概念の研究に留まろうとするのではなく、〝外から観測可能な言葉〟と〝外からは見えない沈黙の中身〟という対極的な焦点を設定することによって、言葉の視点からの宗教把握を目指すということである。本稿の最初に παρρησία のことについて触れたが、確信にあふれつつ社会に向かって公然と語るという、この語の示す性質は、内面における見えない様々な、ある時は葛藤を伴った沈黙と相対する極といえる。この昔の懐かしい研究が、筆者にとってのヒントになった。この二つの焦点に基づいて宗教を言葉の観点から捕らえてみようとするわけである。宗教上の確信は、覚醒・回心・悟りなど様々な言葉で表現されている。この宗教的確信への到達は一朝一夕で達成されるわけではない。そこには自己のあるべき姿を求めての内面への省察やそれを外面から誘発する様々な

刺激、さらに刺激に対する種種の反応が見出される。これらはすべて内面の沈黙のうちに生起するが、この沈黙は自己にとっての明確な論理や言葉を求めての苦闘ともいえる。この苦闘から言葉の明言に至るまでの変化を総合的に捉えようとするのが、筆者の意図である。本稿では、その糸口として、聖書に現れる沈黙の特質の考察から始めることとしたい。その際、一般の文書と違って、聖書では神との関係が基礎となるので、単に人の沈黙が対象となるのみならず、神との関係の中での沈黙、さらに神の沈黙といったことが対象となる。

三　沈黙の諸相

前述のように沈黙は文脈から理解せざるを得ないので、沈黙についての考察は、語るという明白な事柄から始めなければならないが、この語るという〝沈黙〟の対極としての〝言葉〟の現実は、聖書においては、神と関連しており、ここから考察を始めなければならない。

聖書によれば、神は天地を言葉で創造された。しかし、神が言葉を創造されたという記述は無い。言葉は被造物ではない。また、人を自らの形にかたどって作られたが、特別に人にだけ言葉を授けられたという記述も無い。人は人として生まれたときから言葉を持ちあわせているのである。人間の精神活動を根底から支える言葉について、聖書はその存在を前提しているのである。また、バベルの塔の話で、人の言葉が乱され、各国語が生み出されたという記述があるが、そこで用いられていた乱される前の言葉は、単純に聖書の話をさかのぼれば、アダムとエバが話していた言葉、神と直接に会話できた言葉が、そのまま受け継がれていたということになる。いわば「母語」ではなく「神語」

とでも称すべきものである。その人類にとってはもはや失われた原初的な単一言語を人がバベルの物語の時点で失ったということは、エデンの園から追放されたことを第一の楽園喪失と称するならば、第二の楽園喪失とでもいえるほどに重大な出来事である。最初の追放は、楽園という空間からの追放であるが、第二の追放は、原初的な言葉からの追放である。これによって、現在の人間世界にまで通じる状況が作り出されたことになり、族長以前に存在した原初の世界の記述を締めくくるにふさわしい内容となっているのである。

教義史的な問題を交えず、素朴に旧新約聖書の記述の範囲内でのみ考えることにすると、言葉が被造物ではないということは、少なくとも創世記の段階では言葉が神的なものであるということが素朴に考えられていたことになる。ヨハネ福音書の冒頭の有名なロゴスについての記述にあるように、まさに「言葉は神であった」ということになる。この神的な言葉を生まれながらに持っていることになる人という存在は、そこからすれば、神と常にともにあるべき存在と考えられていることになり、神なき者としての人間存在は考えられていない。神なき者についての聖書の記述[2]は、ヨブ記18：21などに見られる「神を知らない者」לֹא־יָדַע אֱלוֹהַּ μὴ εἰδότων τὸν κύριον や詩篇14：2などに見られる「愚か者」נָבָל ἄφρων であって、神そのものが存在しないということを前提とした記述ではない。

すると、聖書の世界では、個体の相互関係という点から考えるならば、神・自己・神と自己以外の存在（簡単に「他者」と呼ぶことにする）という三種類の存在があることになり、言葉も、それと対極の沈黙も、これら三者間の関係に応じて次のような種類が存在すると想定される。

①神と自己との関係

②自己と他者との関係

③他者と神との関係
④神と自己との関係に対する他者の関係
⑤自己と他者との関係に対する神の関係
⑥他者と神との関係に対する自己の関係
⑦自己が自己に対する関係

これらは単に理論的に整理してみた関係であるので、実際に聖書の中にこれらの関係が純粋に存在するかどうか、特に②と③の関係を聖書の範囲内でどれだけ積極的に見出しうるかについてはいささか疑問な点もないではない。というのは、神と不可分離の人間存在という基本からすれば、純粋形としての②や③は、表現としては仮に登場したとしても、神の存在が背後にあるために、実態は⑤や⑥の関係であり、本当は見出し得ないのではないかと思えるからである。これら七つの関係の細かな検討については、別の機会に考察するとして、ここでは比較的重要と思われるいくつかの点について述べてみたい。

A. 最初に①神と自己との関係について取り上げよう。詩篇139：4には、次のような言葉がある。

わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。

さらに、ローマ人への手紙8：27では、

人の心を探り知るかたは ὁ δὲ ἐραυνῶν τὰς καρδίας、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。

とあり、これに類似した表現はヨハネ黙示録2：23の「人の心の奥底までも探り知る者」ὁ ἐραυνῶν νεφροὺς καὶ καρδίας にも見られる。これら三つの聖句が共通して指し示していることは、神との関係では、人の思いは語らずとも神には知られているということである。それでは、人は神に向かって何も語る必要はないのかというと、そうではない。なぜなら神から人に向かっては透明であるかもしれないが、人から神に向かっては透明ではないので、神を見失わないために神に向かって正しい接し方をする必要があるからである。そこで、伝道の書（5：2、マソラ本文・新共同訳では5：1）は次のように説いている。

神の前で軽々しく口をひらき、また言葉を出そうと、心にあせってはならない。神は天にいまし、あなたは地におるからである。それゆえ、あなたは言葉を少なくせよ。

即ち、神に接するに多弁は不要である。イエスもまた、祈りを教えるにあたって次のように語られる（マタイ6：7-8）。

また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている。だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。

この関係における沈黙は、例えば、詩篇46：10（口語訳）の次のような表現の内に見られる。

静まって、わたしこそ神であることを知れ。

הַרְפּוּ וְדְעוּ כִּי־אָנֹכִי אֱלֹהִים

この箇所の「静まって」は、σχολάσατε (LXX)、vacate (Psalterium Gallicanum)、cessate (Psalterium juxta Hebraeos)、「力を捨てよ」（新共同訳）、とそれぞれ訳されており、רפה という動詞のヒッフィル形の訳語である。これは、サムエル記上15：16に見られるように「止める」とか「見離す」という意味を含んでおり、いわば敵への追撃を止めるというような意味であると考えられるので、「活動を静める」という内容であるが、哀歌3：26では、文字どおりの言葉を発しない沈黙が語られている。

主の救を静かに（דוּמִיָּה）待ち望むことは、良いことである。

神と自己との関係での沈黙に関して、特に重要な問題である死と沈黙という点についても触れておこう。人は死において本当に意識も無意識も無い状態となり、したがって本当の意味での沈黙をはじめて守ることになるのか、あるいは死してもなお閉ざされた沈黙の内を行くのであろうか。まず、人間存在が神とともにあるものであるということを徹底して考えれば、神は死後も人とともにおられるはずである。詩篇139：8は、そのことを告白している。

わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。

神が人に伴うという点は、これで明かであるが、死者から神へ向かうという事は不可能である。この点を詩篇6：5は次のように語っている。

死においては、あなたを覚えるものはなく、陰府においては、だれがあなたを／ほめたたえることができましょうか。

כי אין במות זכרך בשאול מי יודה לך׃

詩篇30：9、88：10、115：17も同様の内容を語っている。次に、死者そのものの意識については何と言われているか。伝道の書は語る。まず、9：5では、次のように語る。

生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。

次に、9：10においては、次のように語る。

すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。

この言葉の根拠として考えられるのは、12：14であろう。

神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事（ロゴイ）を善悪ともにさばかれるからである。

即ち、死者には意識も無く、死後には何らの活動も存在しない。そして、成し遂げた業に応じての裁きを待っているということになる。こうして、人にとっては、その行為のみならず、隠された内面の事柄等も、神との関係においては重要なのである。

旧約聖書のこの伝統を新約聖書は次のように受け止めている。ヨハネの黙示録14：13は、殉教者との関連で述べられていると考えられるので、直接には、伝道の書のような知恵の伝統に遡及するとは考え難いかもしれないが、歴史的な配列で考えると、この伝統の流れに、殉教者における業の評価が入ってくると考え得るのではないだろうか。

またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』」。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。

また、死者は、何の行為もしないので、その有効性についての議論は別としても、昔の教会の中にはすでに死んだ者がキリストの救い（復活）にあずかるようにと、死者とキリストとの繋がりを生み出すために死者のための洗礼を受ける人たちもいた（第1コリント15：29）。

B．第二に、⑤自己と他者との関係に対する神の関係について見てみよう。創世記24：21には次のような記述がある。

その間その人は主が彼の旅を祝福されるか、どうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた。

これは、イサクの嫁選びにリベカのところに行ったアブラハムの僕の行動について記したものである。また、列王記下4：27には、次のような記述がある。

ところが彼女は山にきて、神の人の所へくるとエリシャの足にすがりついた。ゲハジが彼女を追いのけようと近よった時、神の人は言った、「かまわずにおきなさい。彼女は心に苦しみがあるのだから。主はそれを隠して、まだわたしにお告げにならないのだ」。

これは、シュネムの女が約束によって得た子が死んだ後にエリシャと対面したときの状況を記述しているものである。

これら二つの記事には、明らかに神・自己・他者の三者の関係が示されている。神との関係を自覚的に感じ取っている者にとっては、他者との関係を単なる目前の他者との関係とは考えず、常にその関係そのものを神の前に置く。特に預言者の神との関係は、すべてこの類の関係といえる。したがって、ここでの沈黙は、神への期待や問いという形態を示すことになり、時によっては、神が沈黙という行為をしていることに対する人の問い――神の存在・意思・正義などへの問いかけという内容を持つことになる。人から神に向かっての問いの方向性――これが、預言に伴う沈黙の特質である。預言というものを神の側面から整理してみれば、それは神の意思を特定の人を通して人々に伝達することであるが、これを伝える人の側から整理すれば、神への期待や問を秘めながら、己を媒体と化し、無にした上

で、外部に語るということとなる。

ここまで考察してくると、いわゆる神義論的な問はどうなるのかという素朴な疑問が生じてくる。世に義人が苦しみ悪人が栄えるという現実があるが、神はこの現実をいったいどのように考えているのか、そもそも神など存在するのかといった類の問である。この問は、上記の預言者のうちで生じる問と一見同一であると見えるが、よくよく考えてみると異なる点がある。それは、前者が、預言を伝える人という一個人の内で生じているのに対して、後者においては、世の中を見渡してみれば、特別に自分に対して神から語りかけられているわけではないが、そのような疑問に満ちた不条理が存在し、なぜだろうかと誰もが疑問を抱くものだという点である。簡単に言えば、前者は特定の状況にある個人と関連し、後者は、不特定の人ないしは人々と関連するという点である。そして、この後者の問の立場は、〝預言〟ではなく〝知恵〟の上に成り立っているものである。そこで、次項において、知恵について述べた後、この問題について、さらに考察を進めることにしよう。

C．第三に、③他者と神との関係について見てみよう。この関係は、最初に述べたように実に微妙である。あたかも他者と神との二者関係に見えながらも、⑥他者と神との関係に対する自己の関係という三者関係に容易に変容しうる可能性を秘めている。また、この関係における沈黙は、言葉の単純な意味での沈黙ではなく、他者と神との関係は自己の外に置かれているものであるので、形式的には見えるもの、読めるもの、聞こえるものなのである。それを、「語り―沈黙」構造においてみれば、〝秘密〟となる。この他者と神との関係の原初的な表現形式は、物語であろう。日常の生活の中に、神との一点において、どの人にとっても残って行く事柄、長い人生において振り返ってみれば

残っている道筋、それをまとめ上げ、記録にとどめれば、否、記憶においてまとめあげるものであっても、それは物語となる。そのような物語は、その一つを幾度となく読み返し思い返しするうちに、やがては、美しい歌ともなろうし、あるいは、そのような物語をいくつも尋ね聞くうちに、世を見つめる一つの知恵の言葉ともなってこよう。このようにして、世の中にある理は、言葉としてまとめられる。それが、知恵である。神を常に背後に持っている聖書の人間観からすれば、世の中の理を言い表す知恵は、単独に知恵としてあるのではなく、言葉の上で現れなくとも神と一般的な人の世界との間に存在する理である。それゆえ、箴言1：7では、次のように言われる。

主を恐れることは知識のはじめである。

この基礎の上に立って、知恵の伝統は、世の中には一般にこのような事があるものだという認識を提示しているので、世の中にある先ほどの神義論的な問いも、まずは複数の人々の間にある問として存在するのだが、そのような一般的な知識としての神義論的問を知る人が、ある機会に自らの身に起こったことではない不条理に触発されて、自らの問として神に問い掛けるとき、真の神義論的問となるのである。しかし、神義論的問は、本来、知恵の問として、一般的なものであり、その問がそのものとして神から答えられることは決してない。答えられるのは、預言というアスペクトにおいて、自己の主体をその問いの中に真に巻き込んだ問に対してのみ、正に〝預言的・啓示的〟に答えられるのである。

「語り―沈黙」緊張関係からみれば、知恵の伝統の関連で、さらに次の二つの事柄が注目すべき事柄である。最初は、知恵が人格のように語り出すという、箴言8：1-3の中に示されている事柄である。

知恵は呼ばわらないのか、悟りは声をあげないのか。
これは道のほとりの高い所の頂、また、ちまたの中に立ち、
町の入口にあるもろもろの門のかたわら、正門の入口で呼ばわって言う。

また、知恵は、一般にあるものとして、いわば人にとって所与の事柄であるので、これが神と結びつくという認識の基では、箴言8：22-25のような表現が出てくることになる。

主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。
いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。
まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはすでに生れ、
山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。

ここに知恵が預言者のように語り出すという事態が生じている。知恵も預言も「語り―沈黙」という角度から見れば共通する部分を持っている。

第二に、「語り―沈黙」の緊張関係からすると、興味あるのは、共観福音書に見られるイエスの譬え話である。まず、マタイ13：34-35は、譬えで語るという行為を次のように旧約の預言の成就と説明している。

イエスはこれらのことをすべて、譬で群衆に語られた。譬によらないでは何事も彼らに語られなかった。これは

預言者によって言われたことが、成就するためである、「わたしは口を開いて譬を語り、世の初めから隠されていることを語り出そう」。

この旧約の引用は、詩篇78：2以下を指すと考えられるが、後半部分はLXXとは異なっている。

[LXX]　φθέγξομαι προβλήματα ἀπ᾽ ἀρχῆς.

[MT]　אביעה חידות מני קדם׃

[マタイ]　ἐρεύξομαι κεκρυμμένα ἀπὸ καταβολῆς [κόσμου].

マタイが「隠されていること」と称するのは、προβλήματα　חידות「謎」である。一方、マルコ4：33-34は、イエスが譬え話をされた理由を、次のように説明する。

イエスはこのような多くの譬で、人々の聞く力にしたがって（καθὼς ἠδύναντο ἀκούειν）、御言を語られた。譬によらないでは語られなかったが、自分の弟子たちには、ひそかにすべてのことを解き明かされた。

さらに、ルカ8：10では、次のように説明されている。

そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである」。

それぞれ、譬え話の意味付けが異なっているが、共通するのは、完全に意味が明白なものではなく、一部が隠されているという点である。この意味で、譬え話は、いささか沈黙の意味合いを持つものといえる。

D．つぎに、⑦自己が自己に対する関係における沈黙について見てみよう。この関係における沈黙は、単独で生起するというよりも、むしろ他のすべての関係から派生するものである。すなわち、問題的な状況に直面して、外に出て行くのではなく、自己自身へ向かうという場合に生じる沈黙である。内面のことなので、ここでは、自らが自らに語りかけ、励まし、あるいは煩悶して自らの中に深く入り込んで行くのである。詩篇77：4,6-9は次のように語る。

あなたはわたしのまぶたをささえて閉じさせず、わたしは物言うこともできないほどに悩む。
わたしは夜、わが心と親しく語り、深く思うてわが魂を探り、言う、「主はとこしえにわれらを捨てられるであろうか。ふたたび、めぐみを施されないであろうか。そのいつくしみはとこしえに絶え、その約束は世々ながくすたれるであろうか。神は恵みを施すことを忘れ、怒りをもって／そのあわれみを閉じられたであろうか」と。

同じ内面での語りであっても、これが神にむかって開かれた語り掛けであると、詩篇63：5のような、まったく逆の気分を持ったものになる。

わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髄とあぶらとをもって／もてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもって／あなたをほめたたえる。

この二つの詩篇に示された違いこそ、内面でのやり場の無い疑問煩悶、さらに恐れや不安の世界を一つの極としながらも、他方の極では神への透き通るような信頼という至高の境地に至る魂という捉えがたい世界の広大さを示すものである。

E. これをいずれの分類に入れて良いのか、苦慮するところであるが、神にも他者にも自己にも関わる究極の人の姿は、イザヤ書に示されている苦難の僕の姿である。特に、沈黙との関係で指摘できるのは、53：7-8である。

彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。
彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。

また、11節では、次のように言われている。

彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。[3] 義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。

ここには、苦しめられても沈黙を守って口を開かず、しかもその苦しみによって他の人を義として死ぬという犠牲の死の姿が描かれている。ここでの沈黙は、自己自身における疑問葛藤のレベルではなく、自己に完結せず、自己を越

えて他者に開かれた人の姿である。その意味で、この声無き黙々とした行動は、むしろ外に向かって燦然と発せられる心を探る光であり、声は聞こえないが、あたかも語るごとく多くの人の心を照らすのである。

ところで、ここに注目すべきことがある。それは、「口を開かなかった」の個所（7節8節）が、使徒行伝8：32-33で、セプトゥアギンタからのそのままの引用という形で用いられている点である。下記のイタリックの部分が、使徒行伝での引用部分である。

καὶ αὐτὸς διὰ τὸ κεκακῶσθαι οὐκ ἀνοίγει τὸ στόμα,
ὡς πρόβατον ἐπὶ σφαγὴν ἤχθη
καὶ ὡς ἀμνὸς ἐναντίον τοῦ
κείροντος αὐτὸν ἄφωνος
οὕτως οὐκ ἀνοίγει τὸ στόμα αὐτοῦ.
ἐν τῇ ταπεινώσει ἡ κρίσις αὐτοῦ ἤρθη,
τὴν γενεὰν αὐτοῦ τίς διηγήσεται
ὅτι αἴρεται ἀπὸ τῆς γῆς ἡ ζωὴ αὐτοῦ,
ἀπὸ τῶν ἀνομιῶν τοῦ λαοῦ μου ἤχθη εἰς θάνατον.

使徒行伝のこの部分は、エチオピアの宦官が、エルサレムからの帰路、ガザへ下る道の途上で伝道者ピリポと出会い、聖書の解き明かしをしてもらうところである。ピリポは、ここから説き起こしてイエスのことを宣べ伝えた。ところ

で、どうしてルカはこの部分を引用個所として用いたのであろうか。この部分の前後にも、イエスの犠牲の死を伝えるためならば、適当と思われる個所は幾らかあるのだから、ここを記したということは選んだということである。その選択の背後には、ルカの思想があるのではないだろうか。筆者は、ここに「語り—沈黙」の緊張構造が見られるのではないかと考えている。口を開かない人は、沈黙しているが、悪を行って罰を受けているわけではないので、読む人の注目を集める。すなわち、この沈黙は多くを語りかける。しかし、その内容は必ずしも理解されておらず、別の種類の沈黙がある。ここに、解説者ピリポが登場し、解き明かす。即ち、意味不明の「語り」が理解され本当の「語り」になるというわけである。「語り—沈黙」の関係は、聖霊との関係においてルカ文書では他にも見うけられる。例えば、聖霊によって励まされ勇気を持って社会に公然と福音を語るという意味での παρρησία 概念の使用は、使徒行伝において際立っている。また、この記事でのピリポはあたかも聖霊の役割を果たしたかのようである。この話の結末の部分（8：39）にある極めて不思議な記述「ふたりが水から上がると、主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見ることができなかった」は、このことを示唆するように見える。

F．その他の沈黙については、いまだ簡単な整理もつかないが、罪、無知、反抗、裁き、無視、拒否、同意などとの関連から生じるものもあるだろうし、神への敬虔な祈りの中での沈黙、即ち、期待を込めての沈黙、聞くための沈黙のようなものもあるだろう。また、逆に、空言のような、語っていても内容のない、本人も良く分からないままにとりとめも無く語るといった事態に見られる、言葉が伴っても意味が不明な事柄や、新約聖書に見られる異言のような事柄も考察する必要があるかもしれない。さらに、そのような考察を現代人の心の内にある沈黙との関連で考察す

ることも、一般的な宗教研究の対象としては意味があると考えられる。

四　おわりに

ここ何年か、否定について考えてきた。それを聖書という場面での分析として考えたとき、単純な否定論理（A—not A）では、聖書全体の現実をとらえるには不十分であるので、その切り口を探していたという事情がある。「語り—沈黙」の関係は、この単なる否定論理の形態を持ちながらも、その内部に生きた多様性を包含しうるような視点と考えられる。しかし、「語り—沈黙」関係における沈黙に関する思索は、ようやく緒についたばかりで、今後の課題とすべき事柄は多い。中でも、宗教と言葉というテーマの下に考え始めた事柄なので、宗教言語論的な全体の枠組みをはっきりさせる事や、その中での沈黙という事態の位置付けを考察しておく必要があると考えている。また、もっと思索の素材そのものについても分析をすすめなければならない。それについては、宗教的表現とは何かという観点から具体的に聖書のテキストを（特にセプトゥアギンタの意味を考えながら）詳細に分析するつもりで準備を進めている。

注

(1) 日本宗教学会編『宗教研究』第316号、133-156頁。

(2) ヨブ記18：21、詩篇14：2； 39：9； 53：2； 74：18； 74：22、箴言17：7； 17：21； 30：22、ガラテヤ4：8、エペソ2：12、第一テサロニケ4：5など。

(3) 「光を見て満足する」という訳には、本文上の問題がある。

מֵעֲמַל נַפְשׁוֹ יִרְאֶה יִשְׂבָּע בְּדַעְתּוֹ יַצִּדִּיק צַדִּיק עַבְדִּי לָרַבִּים וַעֲוֹנֹתָם הוּא יִסְבֹּל׃

ἀπὸ τοῦ πόνου τῆς ψυχῆς αὐτοῦ, δεῖξαι αὐτῷ φῶς καὶ πλάσαι τῇ συνέσει, … (LXX)。

彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。…(新共同訳)。